



郵政博物館

研究紀要

郵政歴史文化研究会編

郵政博物館 研究紀要

令和2年度 第12号 (2021年3月)



令和2年度 第12号 (2021年3月)

表紙解説

『郵便現業絵巻』(久保田米僊^{べいせん} 郵政博物館収蔵)⁽¹⁾

第九図 郵便受取所、郵便貯金預所の情景

“Postal Agency and Letter-Box Pillar”

郵便受取所は集配業務を取り扱わず、簡易な郵便業務のみを取り扱う施設で、地域の名士や地主らによる土地と建物の提供により開設された。この郵便受取所には郵便貯金預所の看板も立てられており、貯金業務も併せて取り扱っている。建物の一部を改良して小さな釣り鐘状の窓口が2つ設けられており、中央に「郵便切手売下口」と記された札が貼られている。来客はこの窓口から切手の購入など依頼できるようになっていた。郵便受取所の傍らには黒塗、雨蓋付の角柱ポストが置かれており、郵便外務員が郵便物を取り出している様子が描かれている。

第十図 人車と脚力による郵便物の運送

“Mail Hand Wagon, drawn by special country post man”

すぐ傍に海が迫り、沖合には小舟が浮かび、手前には松林に囲まれた海岸道が広がる風光明媚な景色の中を2人の運送員が郵便物を運ぶ姿が描かれている。一人は郵便旗を掲げた人車(小包通送車)を牽いて山道を登り、もう一人は郵便行李を肩に担ぎ隧道へ向かっている。明治20年代になると、東海道などの幹線や都市部の郵便物の運送に鉄道や馬車が利用されるようになったが、全国的に見ればまだ運送員の脚力に頼るところが多かった。

(編集事務局 田原)

1 明治26(1893)年、アメリカ合衆国シカゴ市で開催された「コロンブス世界博覧会」に出品するために制作された作品。詳細は、『郵政博物館 研究紀要』(第8号、2017年)を参照。